兎園随筆③

〝確かさ〟のむこう

蕪木寿江

夏休みになると待ち兼ねたように卒業生のS君が泊りに来ます。そして必ず梅干の瓶を見つけては、「これY先生のお母さんが作ったの？」と、何でもよく覚えていて聞きます。「そうよ、S君にって又今年も作って下さったのよ」「うーん」「うめごはん食べる」という風に同じ会話で出会いが始まります。

入園した当時は、言葉も話さず僅かに先生の言葉のまねだけをしていたSちゃんが、お昼に私のお弁当箱の梅干しを指さして、「うめ」と言い初めました。「梅干し欲しいの？」と言うと、もう違うことを考えているので、そのまま梅干しを残しながら食べていると、又、「うめ」と言い、「梅干し食べるの？　すっぱいわよ」と言うと、指でつまんで一ぺんに頬ばります。見ている方の顔がゆがむ程です。「うめ」から「うめある」になるまでに六ケ月が過ぎました。お弁当というと「うめ」から始まるので、他のお友達も「うめぼしだよ」と言ってSちゃん

にあげるのを楽しみにするようになりました。皆、お友達になりたいのです。おいしそうに、嬉しそうに食べるSちゃんを見ていると、ほっとするのでしょうか。

「この頃、お弁当に梅干しを入れてって言うんですよ。うちの子あんまり好きじゃなかったんですけれどね」と話しかけてくるお母様もあります。僅かに漬ける梅干しでは足らず同僚のお母様が漬けて下さったと言うと、四年経った今でも覚えているのです。「うめ、ある？」と言うことは、「僕を愛している？」と言うことなのです。登園すると、トイレの紙は一つずつひっぱる、水道の元栓のふたを開けて見る、プロパンの元栓にさわる、と一応しなければ次の活動に移れない中で、先生を通して友達とかかわりながら、常動行動が減っていきました。半日保育で午后から母の会がある時などは、「家に寄って行かない？」とか「お昼を一緒に食べましょうよ」など仲の良いお母さんのお友達もできて、指人形を作ったり、編物を教えてあげたり、お母さん自身も人間が好きになってきました。相変らずお弁当の時は「うめある？」が続き、頂いた友達には、自分のサンドイッチをあげたり、好物のメロンをあげたり、自分のお弁当がなくなってしまう程配って歩き、少しずつ人間関係ができてしまった。卒園も近い一月のある日、お母様からこんなお便りを頂きました。

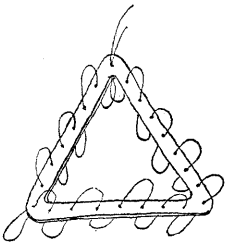
「いつ雪降るの？」とテレビのニュースを見ては問いかけています。豪雪に悩まされている地方の雪を少し分けてもらって、S夫の希望をかなえてやりたいなあ、と思う近頃です。電車の中で、「今日、お手紙ある？」と聞くと「ないよ」と答えていたのに、家に帰ってちゃんと自分でお弁当箱を流しに出しながら、「お母さん、あったよ、おてがみー」「なにかいてある？」「Sちゃんは元気で遊んでおりこうさん、だって書いてあるよ」「うん」「お母さん、きれいなの、はそあるよ」「なに？　はそって……はねでしょ？　羽根わかる？」「わかるよ」「誰が羽根はってくれたのかな」「せんせいはった」「羽根の色わかるかな」「わかる、あか

とあおとみどり」「そうーよくわかるねえ」得意顔です。一枚のお手紙でこんなに親子の会話ができるようになりました……ありがとうございます。

子どもとの会話ができるってこんなに楽しくて、また子どもってこんなに可愛いものかと、しみじみと母親としての喜びを身にしみて感じている日々です。この幸せがずっと続きますようにと願うばかりです。

いつものように乗り換えて駅でガムを買ってあげました。包み紙で鶴を折って渡すと、前はクシャクシャにして捨てゝいたのに、今日は、「これなに？」と聞くので、「つるよ」と言うと「つる、うん」とわかってくれて、またガムを出して、「もう一つ、つくって、つうつくって」「つうじゃあないよ、つるよ」「つる」こんどは本当につるとわかったようでした。「お母さん、持ってて」と言うので、持って家に帰ると、コップに水を入れて折り鶴を浮べて、「お母さん、つる泳いでいるよ」と言って見せてくれました。幼稚園帰りの買い喰いは普通のお母さんにとってはタブーな事でしょうが、私達親子にはたまらない喜びの発見なのです。

「S君、小兎はクローバーが好きみたいよ、お父さんや、お母さんは葛の葉がいいわ、茎もポキポキ音をたてて食べるからね」「もういい？」「もっと沢山取らないと、大人が五匹子供が三匹いるんですもの」「もう、これでいい？」「すぐあきる子は弱虫よ」「かぶちゃん、もう暑いよ——」

蝉が啼きだしました。今年は冷夏だという予報を聞いていたのに、三十度以上が続いています。確かそうなことが、たまたま崩れるところに、人間社会の面白さがあるのでしょうか。

（神奈川・市が尾幼稚園）